

## 新型コロナウイルス感染症予防に対する藤間病院の方針について

政府は3月13日より原則としてマスクの着用は個人の判断にゆだねるとの見解を示しました。しかしながら病院や高齢者施設などの重症化の恐れの高い施設内では着用が望ましいともしています。実際にこのような施設ではひとたび感染がおこるとクラスター感染となりやすく、予防のための対策が必要と考えられるのです。

感染制御学の専門家である大阪大学の忽那賢志(くつなさとし)教授のコメントを挙げておきたいと思います。

“場面や地域の感染状況に応じて感染リスクを考え、マスクを着けるかを自分で判断する力を養ってほしい。

具体的には、現在のように感染状況が落ち着いていて、周囲に重症化リスクの高い人がいない場合は、マスクを外しても、比較的安全と考えられる。一方、必ず着けてほしいのは、病院や高齢者施設など、重症化リスクの高い人が周囲にいる時だ。マスクを着用すれば、くしゃみをした時などの飛沫(ひまつ)の量を大幅に減らせる。自らが無症状でも感染していた場合に重症化リスクの高い人にうつさないため、意義は大きい。社会全体としてマスクを外す雰囲気が強まったからといって、病院にマスクなしで入るのは避けてもらいたい。

政府は、混雑した電車やバスに乗る時も着用が効果的だとしている。電車内でも黙っていればそれほど感染リスクは高くないが、混雑時に話す場面では、着けた方がよいだろう。

屋外で密集せず、1メートル以上の距離を保てるなら、今年の花見はマスクを外して楽しめる可能性がある。レジャーの場面では、個人の判断にばらつきが出るだろう。肌が荒れるなどマスクを着けられない事情がある人もいる。

感染状況が厳しくなれば再びマスクを着けることが望ましくなるかもしれない。新型コロナが終わったわけではないことも覚えておきたい。マスクを巡っては、コロナ禍で社会の分断を招いてしまったこともあった。今後は着ける人も、着けない人も、尊重しあえるようにしていきたい。”

忽那教授のコメントは中立の立場から発せられた非常に説得力のある見解であると思います。

現在、感染状況は落ち着いては来ていますが、4月4日16時の時点で1日の全国の感染者数は9406人と決して少ない数ではありません。埼玉県では435人です。確かにオミクロンの流行以降は重症化率こそ減っていますが、感染者数が多いため重症者は依然として少なくないのが現実です。ちなみに2021年1年間の新型コロナ感染による国内の死亡者数は約15,000人であるのに対して、2022年では30,000人を超えているのです。死亡者数は決して減ってはいないのです。

このようなことを考慮すると医療機関内では重症化リスクの高い人を守るためにマスクの着用は必要と考えています。屋外の密にならないところではマスクを外してのびのびとした時間を楽しんでもらいたいと思いますが、ひとたび病院に入るときにはどうかマスクの着用をお願いしたいと思います。

以上を当面の方針といたしますので何卒ご賢察くださるようお願い申し上げます。